



共同認証評価基準

改定案

I. 改定の背景

(A) 共同認証評価基準改定の背景

高等教育を取り巻く環境は、グローバル化、技術革新、労働市場の変化、そして社会的な影響力の高い研究への期待の高まりによって大きく変容している。こうした状況を背景に、共同認証評価基準は、国際的な質保証の最新動向や、大学に求められる将来の方向性を踏まえて大幅に改定された。

改定案では、大学がイノベーション、包括性、そして社会的レジリエンスを担う存在として果たすべき役割に込めているかを判断するため、戦略性や発展性などを統合的に評価する枠組みを導入している。特に有識者との協議、国際的な枠組みとの比較、実務者の声などを踏まえて設計されたこの枠組みでは、大学が自らの使命に沿って柔軟かつ効果的に運営を行い、デジタル環境への適応力を高めつつ、産業界や地域社会など他セクターとの協働を強化することが重視されている。

改定は以下の5つの原則に基づいて行われた。

①国際的なアジェンダや社会的ニーズとの整合性の確保

国連の持続可能な開発目標（SDGs）の理念に則り、公平性や持続可能性の確保に加え、生涯学習の推進、公共的役割の遂行、そしてグローバル市民意識の醸成において、大学が社会に果たす役割を重視する。

②戦略とインパクトを通じた「質」の再定義

これまでのコンプライアンス重視の評価方法から、大学の戦略的な目標や計画、それに基づく成果の測定や社会的価値の創出に焦点を当てた、より柔軟で目的志向の評価枠組みへと転換する。大学が単に教育や研究の質を高めるだけでなく、社会や地域、経済、文化などの発展に果たす役割を重視する。

③ステークホルダーの参画と透明性の確保

学生、教職員、雇用主、卒業生、地域社会など、内外の多様なステークホルダーの声を反映した参加型ガバナンスの確立を図り、信頼や柔軟性を高め、社会の共通課題に向かって協働することを重視する。

④技術革新とデジタル時代への対応

人工知能（AI）、仮想現実（VR）、ラーニングアナリティクス（学習データ分析）などの新たな技術の重要性を踏まえ、教育課程、教育方法、ガバナンス、質保証体制において、これらの技術を積極的に取り入れた枠組みを導入する。

⑤ルーブリックを通じた発展的評価の促進

すべての評価指標に対して「初期段階」から「卓越段階」の5段階ルーブリック評価を導入する。これにより、大学は自らの取り組みを段階的に認識することができ、体系的な自己点検・評価や外部評価につなげることができる。

総じて、改定案では、共同認証を単なる質保証のためのツールではなく、大学に戦略的な変化をもたらすための枠組みとして位置づけている。大学は、この枠組みを活用し、将来に向けて柔軟性と社会的影響力を高めることが期待されている。

(B) 改定案における改定の焦点と主な内容

- 基準の戦略的統合**
 現行基準では個別に設定されていた「基準1 Mission, Goals & Strategy (使命・目的・戦略)」と「基準6 Governance(ガバナンス)」を、改定案では「基準1 Institutional Mission, Governance&Strategic Sustainability (大学のミッション、ガバナンス、戦略的持続性)」として統合した。これにより、リーダーシップや方針の一貫性をより総合的に把握し、評価の重複を避けつつ、大学全体の取り組みの整合性や相互関係を踏まえて一体的に捉えることが可能となる。
- 国際的な政策枠組との統合強化**
 持続可能な開発目標 (SDGs)、組織のレジリエンス、デジタルにおける公平性、包括性といった国際的に重要なテーマを明示的に組み込み、各大学が国内外における社会課題に積極的に取り組んでいるかを評価するための基盤を提供する。
- ステークホルダーの参画、倫理的リーダーシップ、社会的インパクトの重視**
 内部的な有効性だけでなく、多様なステークホルダーを巻き込む能力、倫理的で先見性のあるリーダーシップの模範を示す能力、社会に測定可能なインパクトを生み出す能力についても評価の対象とする。
- 新たな技術の活用と将来への適応**
 改定案では、デジタルイノベーション、AI、VR、没入型学習環境、データ分析などの新たな技術を、質保証における評価項目として組み込んでいる。これは、最新技術の効果的な活用が、教育・学習・ガバナンスを含めた大学の組織的な有効性に大きな影響を与えている現状を反映したものである。
- 他大学との差別化と革新的な取り組みへの支援**
 改定案は、ガバナンス、教育課程、研究、社会貢献などの分野における革新的な取り組みを重視しており、独自の取り組みによって他の大学との差別化を図る大学を支援するよう設計されている。
- ルーブリックによる段階的評価の導入**
 すべての評価指標には「初期段階→発展段階→成熟段階→先進段階→卓越段階」という5段階のルーブリックが付されており、大学としての取り組みの段階的な把握やそれを踏まえた自己点検・評価を促進するとともに、これを外部評価に活用することでその透明性と一貫性を高めている。

II. 基準、評価指標及び指標の説明

基準1：使命、ガバナンス及び戦略的持続可能性

本基準は、大学が使命を明確に定め、包括的なガバナンスを確保し、持続的に発展していくためにデータに裏付けられた成長戦略を実施しているかを検証するものである。大学の使命は、外部環境の変化への対応、AIなどの新たな技術の責任ある活用、デジタル・トランスフォーメーションや持続可能な開発といった国際的に重要な課題に沿ったものであることが期待され、リーダーシップ、ステークホルダーの参画、財政的基盤といった要素は、大学としてのレジリエンスと社会的な影響力を高める上で重要な要素として位置付けられる。

	評価指標	指標の説明
1-1.	使命、ビジョン及びアイデンティティ	大学はその使命・ビジョンを明確に定義し、教育理念、公益への貢献及び持続可能な未来の形成における役割を明確に示している。これらの使命及びビジョンは、ステークホルダーの意見を取り入れて共同で策定されており、一般に公開されるとともに、大学のあらゆるレベルにおける戦略・行動の指針とされている。

	評価指標	指標の説明
1-2. 戦略的対応力と 技術的先見性	大学は、外部の動向を把握し、AI等の新たな技術やデータ分析を活用して得られた知見を、大学としての戦略的計画や重要施策に反映させ、社会的・世界的な変化への対応力を高める必要がある。	大学は、高等教育、産業界、政策及び社会の動向を、国内外問わず積極的に注視し、得られた知見を戦略及び運営上の計画に反映している。また、AIを含むデータ分析や新たな技術を活用し、先見性と対応力を強化している。大学としての重要施策は、人口動態の変化、技術革新、持続可能な開発目標（SDGs）など、国際的に重要視される課題を含む外部の環境やニーズに対する十分な理解に基づき策定されている。このような将来を見据えた取り組みにより、社会的な影響力や大学としての持続的な発展を支えている。
1-3. 戦略的計画と レジリエンス	大学は、その使命に沿った、エビデンスに基づく中・長期の戦略的計画を策定し、それらについて定期的に見直しを行う必要がある。また、データやAIを活用し、多角的に自らの取り組みを分析することで、長期的な適応力と組織的なレジリエンスを強化することが求められる。	大学は、革新的な取り組みを促進し、組織的レジリエンスと新たなグローバル課題への対応力を高めつつ、自ら掲げる使命の達成を支える中・長期の戦略を策定し、実施している。これらの計画はデータに基づき、AIを活用した予測分析やシナリオ・プランニングなどの分析によって強化されている。また、計画は定期的に見直され、包括的な協議プロセスを通じて改善されている。
1-4. ガバナンスと ステークホル ダーの参画	大学は、その役割と責任を明確に定義するとともに、主要なステークホルダーを意思決定に参画させる、透明かつ包括的なガバナンス体制を確立する必要がある。	大学のガバナンス体制は明確に定義され、透明性が高く包括的であり、その役割と責任は教学部門と管理部門に適切に割り当てられている。意思決定プロセスには、教職員、学生、卒業生、産業界や地域社会の代表者など、内外の多様なステークホルダーが参画し、組織の説明責任を果たすとともに意思決定の包括性を確保し継続的な改善を促している。
1-5. 倫理的リーダー シップとスタッ フ・ディベロ ップメント（SD） 活動	大学のリーダーシップは、将来を見据えて倫理的に形成され、包括的なガバナンスを支援するとともに、教学・管理部門の職員に対する継続的な専門能力の向上を推進する必要がある。その際には、特にデジタル技術やAIに関する能力向上を図ることが求められる。	大学のリーダーシップは、将来を見据え、大学の固有の価値観に根ざし、倫理的基盤を持つものである。これにより、大学は包括的なガバナンス、データに基づく意思決定、組織的な学習を推進するとともに、AIの責任ある活用を含む技術的・環境的・社会的変革を通じて組織を積極的に牽引している。また、教学・管理部門の職員に対する専門能力の継続的な向上を推進するとともに、デジタルリテラシーやAI関連能力等も含めた大学全体の能力強化を図っている。

	評価指標	指標の説明
1-6. 財務的な持続可能性	大学は、健全な財政運営を維持し、教育研究上の使命及び戦略的な重要施策に関わる取り組みを長期にわたり維持するための十分な財源を確保する必要がある。	大学は、教育研究上の使命を持続的に遂行するため、健全な財政運営を維持している。財政計画は、大学の長期的な目標の実現を支え、運営の継続性を確保するとともに、内外の変化に適応するものである。

基準2：内部質保証と説明責任

本基準は、大学がエビデンスに基づいた透明性の高い内部質保証システムを適切に機能させ、恒常的に教育の質の保証及び向上に取り組んでいるかを検証するものである。特に、大学が内部質保証のための明確な方針を策定し、定期的な点検・評価及びステークホルダーからのフィードバックを活用して教育成果の向上を図っていることが重視される。また、データ分析やAIを活用して内外の状況をリアルタイムで把握し、継続的な改善を行うとともに、情報公開により透明性を確保することで、説明責任と大学への信頼を強化することが求められる。

	評価指標	指標の説明
2-1. 内部質保証の方針とその体制	大学は、基準、目的及び責任の所在を明確に定義した強固な内部質保証システムを確立する必要がある。また、そのシステムは、大学の戦略的目標及び国際的なベストプラクティスとの整合性を確保するため、定期的に見直すことが求められる。	内部質保証のための全学的な方針が策定され、基本的な考え方、基準、運用手続が明示されている。この方針は国際的な質保証の枠組みに沿ったものであり、大学の目標や新たな教育動向を反映するため定期的に更新されている。
2-2. 運営の有効性とインテリジェント・モニタリング	内部質保証システムは、教学・管理部門全体にわたって効果的に機能している必要がある。必要に応じて、一元管理されたデータシステムやAIを活用し、内外の状況をリアルタイムで把握しつつ、エビデンスに基づく改善を行い、大学の質保証に関する目標との一貫性を確保することが求められる。	内部質保証システムは、全学的な内部質保証の推進に責任を負う組織や委員会によって管理され、大学のあらゆる階層に組み込まれている。これにより、実施の一貫性、部門横断的な協働、並びに質保証の基準や手続に沿った運用が保証されている。また、必要に応じてAIや一元管理されたデータシステムを用いて、調整や状況把握、意思決定に関わる能力を強化している。

	評価指標	指標の説明
2-3. エビデンスに基づく質の向上	大学は、内部質保証システムのパフォーマンス及び有効性を評価するための体系的な仕組みを整備する必要がある。その際、データ分析や必要に応じたAIの活用により、継続的かつ将来を見据えた質の向上につながる知見を創出することが求められる。	内部質保証システムは、体系的な評価、データに基づく分析及び包括的なステークホルダーからのフィードバックを通じて、教学・管理部門全体にわたってエビデンスに基づく意思決定と継続的な質の向上を効果的に促進している。また、必要に応じてAIを活用して将来の傾向を把握し、今後の課題に対応した改善策を実行している。
2-4. 透明性のある情報公開	大学は、教育課程の提供内容、学生の学習成果、財務の健全性、社会貢献等に関する正確かつ適切な情報を適時に提供し、かつ容易にアクセスできるようにすることによって、教育の透明性を確保する必要がある。	大学は、教育内容、学生の学習成果、財務の健全性、戦略的優先事項などに関する包括的かつ最新の情報を定期的に公表することで説明責任を果たすとともに、十分な情報提供に基づくステークホルダーの関与を確保している。
2-5. 点検・評価及び評価の仕組み	大学は、教職員、学生、卒業生、雇業者及び外部パートナーからのフィードバックを体系的に収集・分析し、その結果を大学の質向上のための取り組みに反映させる必要がある。	内部質保証システムは、定期的な内部レビュー、外部のピア・レビュー及び国際的な基準との比較を通じて検証されている。これらの評価は、システムの改善を図るとともに、内部質保証の機能が大学の変革を支える上での機動性、適切性及び有効性の維持・向上に資するものである。

基準3：教育・学習・学生の達成度

本基準は、大学が一貫した教育方針の下で、包括的な入学制度を整備し、設定された到達目標に沿った教育課程を編成・実施することにより、学習成果の確実な達成を保証しているかを検証するものである。特に、教育におけるテクノロジーの活用、包括的な教育実践の推進、信頼性の高い評価方法の導入及び学生の多様なニーズに応じた支援体制の整備が重視される。また、教員組織、教育インフラ、教育課程の評価・改善プロセスが相互に連携し、質の高い教育の提供、公平な学習機会の確保並びにデータ分析やステークホルダーの意見を基盤とした継続的な改善の着実な実施が求められる。

	評価指標	指標の説明
3-1. 教育方針	大学は、入学、教育課程の編成、学位授与において一貫性を保ち、透明性と公平性を確保するとともに、教育目標と整合性のとれた教育方針を策定し、周知する必要がある。	大学は、入学、進級、卒業及び教育課程の編成に関する包括的な教育方針を策定し、周知している。これらの方針は、一貫性と透明性を有し、教育目標や国際的に優れた取り組みに即した内容となっている。

評価指標	指標の説明
3-2. 入学資格を有する学生の受け入れ	<p>大学は、入学を許可された学生が志望する学位課程で成果を上げる能力を有することを保証するため、大学の使命及び学習目標に沿った、明確かつ公正な学生の受け入れ方針を策定し、適切に運用する必要がある。</p>
3-3. 教育課程の編成とテクノロジーを活用した学習	<p>教育課程の編成にあたっては、学位授与方針に定められた学習成果の習得のため、分野間の関係性を踏まえ、持続可能性に関する課題や最新の技術的知見を取り入れることにより学問的水準を維持するとともに、国際的基準との整合を図る必要がある。</p>
3-4. 教育提供のための教員組織	<p>教員組織は、新たな教育的ニーズや学習者の多様性に対応するため、協働的かつ学際的な体制を整え、革新的な教育方法の開発と実践を推進する必要がある。</p>
3-5. 学習支援と教育方法	<p>教育の実践にあたっては、包括的で学生中心の教育方法を用い、学習者が自身に合った学習を取り入れ主体的に学ぶ環境を提供する必要がある。この際、学習支援サービスやデジタル技術を効果的に活用し、学習成果の向上につなげることが求められる。</p>

	評価指標	指標の説明
3-6. 学習環境と教育 インフラ	大学は、学生の多様なニーズに対応し、個々に応じた学習が効果的に行われるよう、包括的で利用しやすい施設やデジタルインフラを整備し、適切に管理する必要がある。	学生の学習や教員の研究活動、多様な学習形態及び個人に合わせた教育体験を支えるため、スマート教室、没入型シミュレーションラボ、AI対応プラットフォームなどを含む大学施設やデジタルインフラは、十分に整備され、利用しやすく、かつ定期的に改修されている。
3-7. 学生支援とウェ ルビーイング	大学は、学生の学習成果、個人の成長及びキャリア形成を支援するため、包括性に配慮した学生支援システムを提供し、すべての学習者が公平に利用できるようにする必要がある。	大学は、奨学金、学業・進路などの相談窓口や、心理カウンセリング、キャリアプランニングなどの学習、心理、社会、キャリア形成に関する多様なニーズに対応する、公平かつ総合的な支援サービスを提供している。これらのサービスは、包括性を重視し、データに基づき設計され、学生のライフサイクル全体を通じて個人の成長、レジリエンス及びウェルビーイングの向上に寄与している。
3-8. 成績評価と 学位授与	学生の学習は、あらかじめ学生に明示した方法及び基準に則って評価される必要がある。また、学位授与における客観性と厳格性を確保するため、評価方法は公正かつ適正であることが求められる。	成績評価は、ポートフォリオ、プロジェクト、実践課題など、多様で実証的な方法を用い、設定された学習成果に明確に対応する形で、適切かつ信頼性の高い方法で実施されている。また、学位授与の手続きは、客観性と厳格性を確保し、大学の規定や専門分野の基準に沿った、透明で一貫性のある方針に基づいて行われている。
3-9. 学習成果の評 価	大学は、データ分析に加えて必要に応じてAI分析を取り入れ、学習成果を複数のレベルにわたって体系的に評価する必要がある。また、こうした評価の結果を、学生の学習成果の達成状況の把握や、継続的な改善と説明責任の遂行に役立てることが求められる。	学習成果は、科目、教育課程、大学の各レベルにおいて体系的に評価されている。これらの評価結果は、カリキュラムの改善、教育の質の向上及び大学の戦略的計画に反映されている。さらに、データ分析に加え、必要に応じてAI分析を活用し、学生の学習成果の達成状況を把握するとともに、エビデンスに基づく意思決定と継続的な改善に役立っている。
3-10. 教育課程の見直 しと改善	大学は、学習成果に関するデータの分析、ステークホルダーからの意見及び学術的・社会的ニーズの変化に基づき、教育課程の編成と教育方法について定期的に点検・評価し、その結果を教育の改善・向上に結びつける必要がある。	教育課程は、カリキュラム・マッピング、学習成果に関するデータの分析、学生・教員・卒業生・雇用者からのフィードバックなどを取り入れた組織的な取り組みを通じて、定期的に点検・評価されている。その結果は、科目内容の改訂、教育方法の改善及び教育課程を大学の重要施策や社会・産業のニーズの変化に適合させるために活用されている。

基準4：ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動と研究の統合

本基準は、大学が教員を採用・育成・支援し、教育・研究及びリーダーシップにおいて卓越した成果を上げるための仕組みを検証するものである。特に、透明性のある業績管理、体系的なファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の機会の提供、研究と知識移転への積極的な支援並びに大学の目標及び国際的な開発課題に沿った学際的かつ社会的意義の高い研究の推進が重視される。

	評価指標	指標の説明
4-1. 教員の採用と業績管理	教員の採用、評価及び昇進プロセスは、透明性と包括性を確保するとともに、学術的卓越性、大学の価値観並びに多様性・公平性・能力主義に関する国際的な基準に適合したものである必要がある。	教員の採用、評価及び昇進は、明確で実績に基づき、包括的で公正な手続きを通じて実施されている。これらの仕組みは、大学の目的、学術的卓越性及び変化を続ける教育的・社会的ニーズを反映したものであり、教育・研究における多様な人材を惹きつけ、確保するよう設計されている。
4-2. ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動	大学は、教員の教育・研究能力及び教育・研究におけるリーダーシップの継続的な向上を推進するため、体系的かつ先進的なファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の機会を提供する必要がある。	大学は、教員に対して、革新的な教育方法、AI及びデジタル技術の活用、全ての学生に配慮したインクルーシブ教育、研究におけるリーダーシップ並びに国際的な学术交流に関する研修を含む、体系的かつ柔軟なファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の機会を提供している。これらのFD活動は、大学の重要施策と戦略に沿って計画され、その妥当性と効果を確認するために、定期的な見直しが行われている。
4-3. 研究と知識移転	教員は、産業界、政府、市民社会及びその他の外部パートナーと積極的に連携し、教育の質の向上に寄与するとともに、イノベーションや研究成果を社会に還元する研究に取り組む必要がある。	教員は、教育の質を高め、地域社会や産業界へ幅広く影響をもたらす研究に積極的に従事している。こうした研究では、AIの活用やデータに基づくイノベーションに重点が置かれ、協働研究を通じて創出された知識は、教育課程に反映されるとともに、アウトリーチ活動を通じて広く社会に普及され、体験的学習の促進及び社会の発展に寄与している。
4-4. 研究の適切性と影響力	大学は、国内外の開発目標に沿った支援を行い、学際的かつ社会的意義のある研究を奨励する必要がある。	大学は、学際的な協働、持続可能性を重視した研究、並びに政策に資する成果を通じて、重要な社会的・国際的な課題の解決に資する研究を支援している。そのために、研究者向けのインセンティブ制度や研究基盤、外部パートナーとの連携を整備し、知識を広く共有できる環境を構築するとともに、社会的な貢献を明確に可視化する仕組みを確立している。

基準5：社会貢献と国際的連携

本基準は、地域社会との協働、戦略的な連携、国際協力を通じて、大学が果たす社会的貢献の成果を検証するものである。特に、社会的責任に関する明確な方針の策定及び社会的課題への対応における

外部ステークホルダーとの協働が重視される。これらの取り組みは、大学の使命に沿って行われ、学生や教職員の流動性や異文化理解力を高めるとともに、地域社会に対して意義のあるインパクトをもたらすことを目的としている。

	評価指標	指標の説明
5-1. 社会貢献に関する方針と取り組み	大学は、市民的・社会的な参画を促進するための方針を明確に策定しており、地域社会及び国際社会において、包括的・公平かつ持続可能な発展を推進する中核的な役割を果たす必要がある。	社会貢献に関する方針や枠組み、取り組みは、教育、研究及び地域貢献を通じて、社会参画と社会発展に対する全学的なコミットメントを示している。
5-2. 産業界及び政府との連携	大学は、産業界、政府及び市民社会と戦略的に連携し、革新的なソリューションを共同で開発するとともに、サービス・ラーニングを推進し、コミュニティ及び社会が直面する課題に対応する応用研究を拡充する必要がある。	大学は、応用研究、政策対話、知識移転及び包括的なイノベーションを支えるため、長期的かつ多様なステークホルダーとの協働関係を戦略的かつ継続的に維持している。これらの連携により、相互学習が促進され、社会的ニーズへの対応や地域社会の発展に貢献することの重要性が広く共有されている。
5-3. 国際化とモビリティ	大学は、オンラインと対面の両方を活用した、誰もが参加可能な国際交流の取り組みを通じて、地域の特性に応じた学生及び教員の交流機会を拡充し、異文化理解力を高めるとともに、持続可能な国際的協力関係を築くことを目指す必要がある。	国際化は、学生や教員が海外やオンラインで交流する機会（物理的・オンラインのモビリティ）、協働型のオンライン国際学習（COIL）、国内での国際交流（IaH）などを組み合わせた、全学的な取り組みを通じて進められている。こうした取り組みにより、学生や教員の国際的能力や異文化理解力が高められ、互いに学び合う国際的な協力関係が育まれている。
5-4. 社会貢献と影響力への寄与	大学は、その使命と戦略に沿って、地域貢献や教育・研究成果の社会への還元、市民との協働活動などを計画的に実施し、地域社会の福祉向上、学習機会の公正な提供、社会的イノベーションの促進に対して、具体的かつ測定可能な貢献を果たす必要がある。	大学の地域貢献及び社会参画の取り組みは、学際的な協働、地域主導型のアプローチや包括的なイノベーションを通して、社会に対して意義あるインパクトをもたらすよう設計されている。パートナーシップはステークホルダーと連携して構築され、その成果は持続可能性、社会的公平性及び国際的責任などの観点に基づき定期的に評価されている。

I. 対応するルーブリック

(A) ルーブリックのレベル定義

レベル	説明
1. 初期段階	取り組みは行われていないか一部の運用にとどまっており、明確な枠組みや体系的な実施体制が整っていない。
2. 発展段階	基本的な取り組みは行われているものの、依然として非公式であり、適用に一貫性がなく、大学の活動に制度的に組み込まれていない。
3. 成熟段階	各種の取り組みは制度化され、大学全体で実施されており、ある程度一貫性を持ち安定的に実施されている。
4. 先進段階	各種の取り組みは全学的に統合されており、定期的な点検・評価が行われ、評価結果とステークホルダーの意見に基づいて改善されている。
5. 卓越段階	統合された取り組みは、革新性、ステークホルダーとの協働、協働的なガバナンス、戦略的なリーダーシップの面で優れており、大学及び社会に対して意義ある成果を生み出している。

(B) ルーブリック表

基準1：使命、ガバナンス及び戦略的持続可能性

指標	レベル1：初期段階	レベル2：発展段階	レベル3：成熟段階	レベル4：先進段階	レベル5：卓越段階
1-1. 使命、ビジョン及びアイデンティティ	使命やビジョンは明確に定義されていない、または公開・共有が不十分であるか、全学的な理解が十分に浸透していない。	基本的な使命とビジョンは策定されているものの、学内外への共有は十分でなく、意思決定にも十分に活用されていない。	使命とビジョンは明確に示され、公表されており、大学の計画策定において一定の指針として活用されている。	使命とビジョンは大学の戦略に有機的に結び付けられており、ステークホルダーの意見を取り入れつつ定期的に見直されている。	使命とビジョンはステークホルダーの意見を取り入れて共同で策定され、大学のアイデンティティや文化、長期的な戦略の指針として中心的な役割を果たしている。
1-2. 戦略的対応力と技術的先見性	外部の変化や動向の把握は限定的であり、得られた知見を大学の戦略に反映させるための仕組みは整備されていない。	外部の変化や動向の把握は一部行われているものの、大学の計画への反映は断片的であり、技術的な基盤も十分に整備されていない。	外部の変化や動向の把握は定期的に行われており、その知見は大学の計画に部分的に反映されている。データ分析の活用はまだ発展段階にある。	外部の変化や動向の把握、及びデータ分析（初期段階のAI活用を含む）によって得られた知見が、大学の計画策定や大学の重要施策に活用されている。	外部の変化や動向を積極的に把握し、AIを活用した分析を行うことにより、先見性と適応力を高め、社会の変化に対応した戦略の実行が可能となっている。また、機動性や社会的な変化に対応した戦略的整合性も強化されている。
1-3. 戦略的計画とレジリエンス	戦略的計画は断片的、または現状に即しておらず、大学の使命やエビデンスに基づいて行われる取り組みとの整合性が十分に確保され	基本的な戦略的計画は策定されているものの、一貫性に欠け、ステークホルダーの意見が反映されていない。また、体系的な評価や	戦略的計画はエビデンスに基づいて策定され、定期的に見直されている。また、大学の使命との整合性も一定程度確保されている。	戦略的計画は将来を見据えて策定されており、データやステークホルダーの意見に支えられている。また、AIツールを活用して、レジリエンス	戦略的計画は柔軟で、幅広いステークホルダーの意見を取り入れたものであり、データ分析やAIを活用した将来予測に基づいて、長期的なレジリエ

指標	レベル1：初期段階	レベル2：発展段階	レベル3：成熟段階	レベル4：先進段階	レベル5：卓越段階
	ていない。	見直しも行われていない。		と対応力を高めている。	ンスを確保している。
1-4. ガバナンスとステークホルダーの参画	ガバナンス体制は公式に確立・定義されておらず、多様な意見の反映や透明性が不十分である。	ガバナンスの役割分担と体制は存在するものの、運用は一貫しておらず、ステークホルダーの参画も十分に行われていない。	ガバナンスは明確に定義され、透明性が確保されている。また、ステークホルダーの参画も一定程度確保されている。	ガバナンス体制は、多様なステークホルダーを積極的に参画させ、透明で責任ある意思決定を可能にしている。	ガバナンスは協働的で、データに基づいて運用され、継続的改善とステークホルダーの主体的参画を支える重要な仕組みとなっている。
1-5. 倫理的リーダーシップとスタッフ・ディベロップメント（SD）活動	リーダーシップは明確な方向性を示しておらず、SD活動やガバナンス体制の整備に対する支援が不十分である。	リーダーシップには一定の包摂性は見られるものの、SD活動の機会には、限定的か非公式なものにとどまっている。	リーダーシップは倫理的に確立され、包摂的である。SD活動は体系的に行われるとともに、大学の目標達成を支援している。	先見性のあるリーダーシップにより、データに基づく意思決定とガバナンスが促進され、職員全体のデジタルスキルやAIリテラシーの向上も支援されている。	リーダーシップは革新的であり、倫理性と先見性を持ち、SD活動やAI活用能力の向上を全学的に主導している。
1-6. 財務基盤の持続可能性	財政計画は長期的な視点に乏しく、予算の透明性に欠け、大学の使命を実現するための十分な資源が確保されていない。	基本的な財政運営体制は整備されているものの、財政計画は短期的で、大学の戦略的目標と十分に連動していない。	財政運営は堅実で、長期的な戦略目標と連動しており、定期的な見直しが行われている。	財政管理体制は、戦略的重要施策を支えるとともに、内外の環境変化にも柔軟に対応している。	財政計画は戦略性と先見性を備え、適切なリスク管理を通して長期的な持続可能性を確保している。

基準 2：内部質保証と説明責任

指標	レベル1: 初期段階	レベル2: 発展段階	レベル3: 成熟段階	レベル4: 先進段階	レベル5: 卓越段階
2-1. 内部質保証の方針とその体制	公式な内部質保証の方針は整備されておらず、質保証に関わる取り組みも体系的に運用されていない。	内部質保証の方針は草案作成段階か部分的な運用の段階にあり、明確さや全学的な統合が不十分である。	大学の目的と整合した内部質保証の方針が公式に策定されているが、その運用は限定的である。	内部質保証の方針は学内の活動に適切に組み込まれ、定期的な見直しが行われるとともに、大学の戦略的計画や国際的な基準とも整合している。	内部質保証の枠組みはステークホルダーの関与を経て整備され、大学運営上の重要な仕組みとして機能しており、ベストプラクティスや大学の目的を適切に反映するよう定期的に改善されている。
2-2. 運営の有効性とインテリジェント・モニタリング	内部質保証システムは公式に確立されておらず、部門間の連携は限定的で対応の多くは臨時的なものである。	内部質保証システムの基本的な仕組みは存在するが、運用は一貫性に欠け、データによる裏付けも不足している。	内部質保証システムは、中心的役割を担う部門の下で調整され、共通のデータ基盤を活用しながら、全学的に安定して機能している。	内部質保証システムは、部門横断的な連携と、ダッシュボードや早期警告などの高度なモニタリングツールを組み合わせることで効率性を高めつつ、全学的な教育及び研究の質の維持・向上に寄与している。	AIや一元的なデータシステムを活用した内部質保証システムが、リアルタイムの意思決定や予測分析を可能にし、全学的に継続的な業務改善が行われている。

指標	レベル1: 初期段階	レベル2: 発展段階	レベル3: 成熟段階	レベル4: 先進段階	レベル5: 卓越段階
2-3. エビデンスに基づく質の向上	内部質保証の有効性を評価する体系的な仕組みが確立されておらず、改善は臨時的な対応にとどまり、記録も十分に残されていない。	内部質保証システムの評価は行われているが、体系的でなく、質の向上を促すための十分なデータが得られていない。	定期的な評価が実施され、その結果をもとに改善を図っている。ステークホルダーからの意見も時折取り入れられている。	データに基づく評価とステークホルダーからの意見が定期的に改善に活用されており、AIを活用して傾向の把握や予測が行われている。	継続的な改善の文化が定着しており、大学の戦略的な変革に向けて、予測分析やAIによる知見が活用されている。
2-4. 透明性のある情報公開	教育や大学の運営状況に関する情報がほとんど、あるいは全く公開されていない。	教育や大学の運営状況に関する情報は一部公開されているが、一貫性、明確性に欠け、入手が困難である。	教育や大学の運営状況に関する主要な情報は適切に公開されている。	教育や大学の運営状況に関する情報は透明性を確保した上で公開され、定期的に更新されている。また、その内容は利用者によって理解しやすく、包括的である。	教育や大学の運営状況に関する公開情報には、パフォーマンス指標、戦略の進捗状況及びインパクト分析が含まれ、これらはステークホルダーと適切に共有されている。
2-5. 点検・評価及び評価の仕組み	内部質保証システム自体を点検・評価し、改善するための仕組みは整備されていない。	内部質保証システムの評価は断続的に行われているが、臨時的か非公式なものである。	定期的に学内での点検・評価が実施されているが、外部ステークホルダーからの意見聴取は限定的である。	内部質保証システムは、学内及び外部による定期的な評価に加え、他機関との比較（ベンチマーキング）を通じて、その有効性が検証されている。	内部質保証システムは大学のガバナンスに組み込まれ、継続的な改善と質向上の文化の醸成を促している。

基準 3：教育・学習・学生の達成度

指標	レベル1: 初期段階	レベル2: 発展段階	レベル3: 成熟段階	レベル4: 先進段階	レベル5: 卓越段階
3-1. 教育方針	教育方針は十分に整備されていないか、内容が明確でない、あるいは運用が一貫していない。	教育に関する基本方針は策定されているが、学内外に十分に周知されておらず、運用に一貫性を欠いている。	教育方針は明文化され、一般に公開されており、学内の主要な業務領域で適用されている。	教育方針は大学の目標と明確に整合しており、定期的にその有用性が点検・評価されている。	教育方針は戦略的かつ公平性に重点を置いており、ステークホルダーと共同で策定され、教育の質とアクセス向上を促進している。
3-2. 入学資格を有する学生の受け入れ	入学者選抜の基準は曖昧、あるいは運用にばらつきがあり、入学希望者に求める水準や公平性が十分に考慮されていない。	学生の受け入れに関する基本的な方針は策定されているものの、大学の使命との整合性に欠け、定期的な見直しの仕組みも十分に備わっていない。	学生の受け入れに関する方針は明確かつ公平に適用されており、大学の戦略的目標と整合している。また、入学者選抜の結果に基づく受け入れ方法の定期的な見直しが行われている。	学生の受け入れに関する方針は一貫性をもって運用されており、データやステークホルダーの意見に基づき定期的に見直されるとともに、ガイダンスを通じて円滑な実施が支えられている。	入学者選抜の手続きは透明かつ公正で、データに基づいて設計されており、学生の学習成果の達成と大学の目的の達成に向けて戦略的に整合している。
3-3. 教育課程の編成とテクノロジーを活用した学習	教育課程は体系的に編成されておらず、AIを始めとする新たな知識や技術の統合は限定的である。	一部の教育課程には学際的な内容やデジタルツールが導入され始めているが、全学的な展開には至っていない。	教育課程には学際的視点、持続可能性、教育技術の基礎的な活用が組み込まれており、定期的に見直しを行う体制が整備されている。	教育課程は国際的な動向を反映し、デジタル及びAIツールを導入し、学習成果の達成状況とステークホルダーの意見に基づいて定期的に見直されている。	教育課程の編成は革新性と先進性を兼ね備え、AIやデジタルプラットフォームと高度に統合されている。また、国際的なベンチマークや予測データの活用を通じて継続的に改善されている。

指標	レベル1: 初期段階	レベル2: 発展段階	レベル3: 成熟段階	レベル4: 先進段階	レベル5: 卓越段階
3-4. 教育提供のための教員組織	教員の役割や責任が不明確で一貫性に欠け、学際的・協働的な教育活動は極めて限定的であるか、あるいは存在しない。	教育提供のための基本的な体制は整備されているが、部門横断的な一貫性のある運用へは至っておらず、学際的な授業は断片的に実施されている。	教員組織と各教員の役割は明確に定められており、教員間の協働と革新的な教育実践に対する支援が広く行われている。	学際的なチームや教員組織が明確に定義され、大学や学生のニーズに合わせて定期的に見直されている。	教員組織は、学際的な連携や教育・研究におけるイノベーションを継続的に推進し、外部環境の変化にも柔軟に対応するとともに、ステークホルダーからの意見と戦略的目標に基づいて運営されている。
3-5. 学習支援と教育方法	授業は教員による一方的な講義形式が中心であり、学生の主体的な学びを支援する体制は十分に整っていない。	学習者中心の教育方法や基本的な学習支援の仕組みは一部で導入されているものの、全学的な実施や継続的な運用には至っていない。	多くのプログラムで、包括的で学生中心の教育方法が採用されており、デジタル技術を活用した学習環境や個々の学習を支援する仕組みが十分に整備・提供されている。	全てのプログラムにおいて、デジタル技術の活用、きめ細やかな学習支援、そして包括的で学生中心の教育方法が採用されており、学習効果が高められている。	AIや最新技術の活用により、教育方法の革新が促進されており、データに基づく包括的な学習支援体制によって全ての学生が公平に学習成果を達成できるよう保証されている。
3-6. 学習環境と教育インフラ	建物や施設の老朽化が進んでおり、利用可能な時間や範囲に制約がある。また、必要な技術設備が十分に整備されていない。	基本的な施設やデジタルインフラは整備されているが、利用可能な時間や範囲に制限がある。また、定期的なメンテナンスも行われていない。	学習に必要な施設やデジタルインフラは概ね整備されており、利便性を高めるための取り組みが継続的に実施されている。	多様な学習形態に対応し、すべての学生に開かれた学習環境が整備され、先進技術の活用により、継続的な維持・改善が図られている。	学習環境では、すべての学生が公平に学習できるよう、個々の学習者のニーズに応じた支援が提供されている。また、AIをはじめとする先進技術の活用により、学習と研究体験の最適

指標	レベル1: 初期段階	レベル2: 発展段階	レベル3: 成熟段階	レベル4: 先進段階	レベル5: 卓越段階
					化が図られている。
3-7. 学生支援とウェルビーイング	学生支援は限定的であり、多くの場合は事後的な対応にとどまり、総合的な支援体制は整っていない。	基本的な学生支援の仕組みは整備されているものの、部門間の連携や包括性が不十分である。	学生の多様なニーズに対応する充実した支援サービスが整備されており、総合的な運用と利用促進のための取り組みが行われている。	学生支援は、多様な学生に対応し、データに基づいて構築され、入学から卒業までの学生のライフサイクル全体にわたるニーズに対応している。	データとテクノロジーを活用した先進的かつ包括的な支援体制により、学習支援への公平なアクセスが確保され、学生のウェルビーイング、個人としての成長及び学習成果の達成が支援されている。
3-8. 成績評価と学位の授与	成績評価は実施時期や方法に一貫性を欠いている、もしくは学習成果との整合性が明確でない。また、学位授与の手続きにも一貫性を欠いている。	成績評価の仕組みは整備されつつあるが、その質と透明性には大きなばらつきがある。	成績評価には妥当性があり、学習成果と適切に整合し、一貫して実施されている。学位授与の手続きも適切に制度化されている。	成績評価は学習成果と適切に整合し、透明性と信頼性が確保されている。また、評価の誠実性と公平性を維持するため、定期的な点検・改善が実施されている。	成績評価は、多様で革新的な手法とデータ分析を活用することで、客観性と厳格性を確保し、評価方法の改善を継続的に実施している。
3-9. 学習成果の評価	学習成果は体系的に評価されておらず、データの活用も最小限にとどまっている。	学習成果の基本的な評価は一部のレベルで実施されているものの、体系的な運用には至っておらず、データの活用は限定的である。	学習成果は科目及び教育課程の両レベルで評価され、得られた結果は教育の検証や改善に積極的に活用されている。	学習成果は科目、教育課程、全学の全てのレベルにおいてデータに基づいて評価され、その結果は教育課程の改善や大学の計画策定に活用されている。	多面的かつAIを活用した学習成果の評価が行われ、その結果は、組織計画と教育課程の改善に役立てられている。

指標	レベル1: 初期段階	レベル2: 発展段階	レベル3: 成熟段階	レベル4: 先進段階	レベル5: 卓越段階
3-10. 教育課程の見直しと改善	教育課程の評価は断片的か、全く行われていない。また、ステークホルダーの意見やデータはほとんど活用されていない。	教育課程の評価の仕組みは整備されつつあるが、運用は一貫性を欠き、データの公式な活用は行われていない。	定期的で体系的な教育課程の評価サイクルが確立され、ステークホルダーの意見や学習成果に関するデータも活用されている。	教育課程の評価は体系的に実施され、ステークホルダーの意見を適切に反映するとともに、大学の戦略や社会的ニーズとの整合性が確保されている。	教育課程の点検・評価は、積極的かつ継続的に行われ、予測分析とステークホルダーの意見を活用して教育内容の革新性と妥当性を高めている。

基準4：ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動と研究の統合

指標	レベル1: 初期段階	レベル2: 発展段階	レベル3: 成熟段階	レベル4: 先進段階	レベル5: 卓越段階
4-1. 教員の採用と業績管理	教員の採用及び業績評価の手続きは明確に定められておらず、不透明で一貫性に欠ける運用が行われている。	教員の採用及び業績評価に関して、能力や実績などを重視する方針は一部存在するものの、手続きの透明性と多様性の反映は限定的である。	教員の採用及び業績評価は、能力や実績などを勘案し、大学の基本方針に即した公式な手続きに基づいて行われている。	透明性と公平性の高い人事制度を整備し、多様で優秀な教員を継続的に確保するため、制度は定期的に見直されている。	教員の採用及び業績評価の仕組みは、国際的な指標を参照して公平性を確保するとともに、発展し続ける学術的・社会的ニーズに応じて戦略的に設計・運用されている。

指標	レベル1: 初期段階	レベル2: 発展段階	レベル3: 成熟段階	レベル4: 先進段階	レベル5: 卓越段階
4-2. ファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動	公式なファカルティ・ディベロップメント (FD) 活動の機会は提供されていない、あるいは提供されているものの参加者が極めて少ない状況である。	一部のFD活動は実施されているものの、その開催は不定期で参加も任意である、あるいは大学の重要施策との関係が限定的である。	体系的かつ定期的なFD活動が整備され、教育・研究・リーダーシップなどにおける能力開発を支援している。	FD活動は大学の目的と整合しており、国際的な動向やAI・デジタル技術の活用、包括性を考慮した教育方法の導入を通じて、教育・と研究の効果を高めている。	FD活動は教員主体で共同設計され、AIを活用した学習分析や最新技術の導入を通じて、全学的なイノベーションの推進に向けて戦略的に統合されており、教育・研究・社会貢献の各分野で測定可能な成果を生み出している。
4-3. 研究と知識移転	教員の研究活動は限定的で、教育と結びついておらず、社会的・実務的なインパクトも乏しい。	一部の教員は研究や地域連携活動に積極的に取り組んでいるものの、協力体制は限定的で組織的な枠組みが整っていない。	教員の研究成果は教育に反映されるとともに、産業界との連携にも活かされている。	教員は学際的かつ協働的な研究に従事し、AIやデータ駆動型アプローチを活用して現実社会の課題に対処し、その成果は教育課程や体験的学習に直接反映されている。	研究は外部のステークホルダーと共同で進められ、AIや高度な分析を活用して変革的な知を創出し、教育力の強化、組織改革、政策対話、社会の発展に寄与している。
4-4. 研究の適切性と影響力	研究において戦略的な重点が定まっておらず、社会的ニーズや国際的動向との関連性が乏しい。	一部の研究は社会的課題や持続可能性に関連しているが、そのインパクトは限定的である、あるいは測定されていない。	大学の支援により、国内外の課題に取り組む研究が推進され、その成果や社会的影響力についても部分的に評価されている。	研究課題は持続可能な開発、公平性、学際的イノベーションの観点を踏まえて設定されており、強固な組織的基盤によって支えられている。	研究は社会変革を促すインパクトを有し、その成果は広く共有され、包括的かつ国際的な知識基盤の構築に寄与している。

基準5：社会貢献と国際的連携

指標	レベル1：初期段階	レベル2：発展段階	レベル3：成熟段階	レベル4：先進段階	レベル5：卓越段階
5-1. 社会貢献に関する方針と取り組み	社会貢献に関する明確な方針や戦略は整備されておらず、活動は断片的かつ非公式に行われている。	社会貢献活動は一部実施され記録も残されているが、大学の目的との整合性は限定的である。	社会貢献活動に関する明確な方針及び制度的枠組みが整備されており、大学の使命に沿って運用されている。	社会貢献に関する方針は、内部及び外部のステークホルダーと共同で策定され、全学的に浸透しており、定期的に見直されている。	社会貢献活動は、地域社会及び国際的な視点に基づき、包括的かつ持続可能な開発を促進する戦略的な取り組みとして位置付けられ、大学の使命とガバナンスに組み込まれている。
5-2. 産業界及び政府との連携	産業界や政府との連携は限定的、あるいは非公式であり、組織的枠組みや測定可能な成果が欠けている。	産学官の基本的なパートナーシップは存在するものの、プロジェクトベースか、短期的、あるいは大学の戦略と十分に整合していない。	大学として応用学習や研究活動を支援し、相互の利益につながる戦略的パートナーシップを維持・活用している。	長期的かつ複数のステークホルダーを含む協働体制が制度化されており、その成果はイノベーションの創出、公共政策における対話、社会的インパクトなどに結びついている。	政府や産業界と連携し、社会システム全体の変革やイノベーション、さらに包摂的な社会発展を推進する産学官連携を主導している。
5-3. 国際化とモビリティ	国際化に関する活動は、一度限りの交流か少数の二国間協定に限定されている。	国際交流プログラムや国境を越えたパートナーシップは存在するが、一貫性のない形で実施されている。	国際化は明確な戦略に基づいて推進されており、学生や教員が海外やオンラインで交流する物理的・仮想的なモビリティ、共同プログラム、文化交流など多様な	国際化は全学的に推進されており、COIL（協働オンライン国際学習）、IaH（キャンパス内国際化）、異文化間能力開発、グローバル連携パー	国際化の取り組みは多様性と相互性を重視して教育、研究、ガバナンスの全領域に統合されており、これらの取り組みにより、大学はグローバルな学習拠点とし

指標	レベル1：初期段階	レベル2：発展段階	レベル3：成熟段階	レベル4：先進段階	レベル5：卓越段階
			活動が実施されている。	トナーシップなど多様なプログラムや取り組みを通じて実施されている。	での役割を果たしている。
5-4. 社会貢献と影響力への寄与	社会貢献活動は体系化されておらず、測定可能な成果が欠如している。	一部の社会貢献活動は社会的に意義のある取り組みとして認められるものの、そのインパクトは限定的であるか評価されていない。	社会貢献の取り組みは大学の使命に沿っており、地域コミュニティとの関わりを促進し、基本的なインパクト評価も行われている。	社会貢献の取り組みは分野横断的に企画され、ステークホルダーと共同で実施されており、持続可能性と公平性におけるインパクトが評価されている。	協働的かつエビデンスに基づいた社会貢献活動を通じて、変革的な社会イノベーションを推進し、グローバル市民としての意識の醸成、公平性の確保、そして誰もがアクセスできる知識基盤の構築に寄与している。